

「**超**ヒマ社会」を DXでさっさと つくる

「社会・産業のデジタルトランスフォーメーション(DX)」をテーマとしたバーチャルイベント「NTT Communications Digital Forum 2021」(主催:NTTコミュニケーションズグループ/2021年10月20日~22日開催)。

本記事は同イベント内のナイトセッションとしておこなわれた「FesaasWebinar企画「超ヒマ社会」をDXでさっさとつくる」から抜粋・再構成したものです。

ナイトセッションは外部有識者やNTT Com社員が「共創」をテーマに、よりカジュアルに、より自由なLiveトークセッションとしておこなわれました。

これからのワークスタイルはどのようになるのか。 DXのその先にある未来はどのようなカタチになるのか。

ICT分野の最前線で活躍する3人のゲストによる示唆に富んだ刺激的な発言は、これからのビジネスを考えるうえでさまざまなヒントを与えてくれると考えます。ご活用いただければ幸いです。

GUEST

※敬称略

「超ヒマ社会」を提唱



中村 伊知哉

iU(情報経営イノベーション専門職大学)学長。政策・メディア博士。多くの企業の社外取締役、業界団体の理事、政府委員等を歴任。著書/「超ヒマ社会をつくる」「コンテツと国家戦略 ソフトパワーと日本再興」他多数。

RPA の先駆者である Blue Prism



長谷 太志

Blue Prism 社長。日本オラクル株式会社に12年間在籍、その後、ダンアンドブラッドストリート TSR 株式会社他を経て、2019年2月に Blue Prism 株式会社に入社。2019年6月1日付で、日本法人社長に就任。

AI による社会課題解決を目指す



石山 洸

エクサウィザーズ代表取締役社長。2006年、株式会社リフルートホールディングスに入社。同社のデジタル化を推進した後、新規事業提案制度で新会社を設立。2017年10月より現職。東京大学未来ビジョン研究センター客員准教授。

「超ヒマ社会」とは!?

「超ヒマ社会」の提唱者である iU 学長中村伊知哉氏のイベント内講演より抜粋・再構成しています

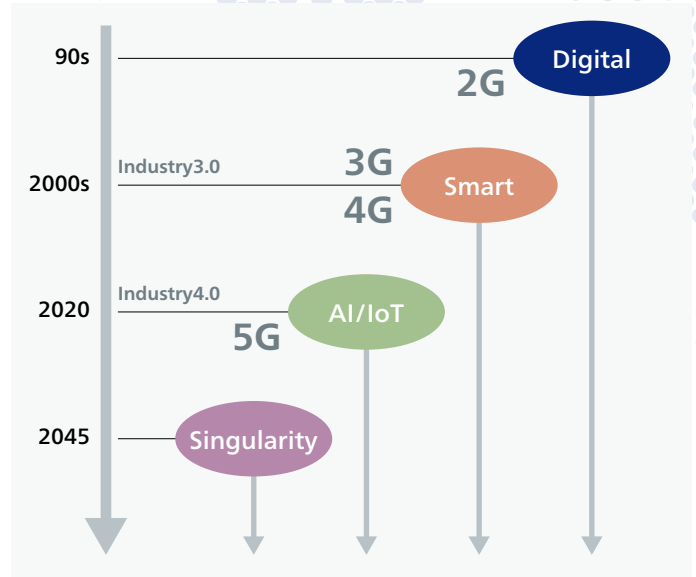
私たちの現在地 ～超スマートな時代の到来～

まずはじめに、私たちがどこに向かうのかという話の前に、いまどこにいるのか「私たちの現在地」を確認します。

いまから30年前、1990年代はじめにデジタルの時代が到来します。インターネットが普及しマルチメディアの時代となります。

そして2010年代、スマホやソーシャルメディア、クラウドが登場、スマート化の波が押し寄せました。そして2020年代。通信で言えば5Gの時代、すべてのコトがネットワークにつながるIoT、そこから吸い上げられたビッグデータとAIが緊密に連携する。これは、いわば超スマートな時代の到来です。

これが、いま私たちがいる世界です。では、私たちはどこに向かうのかという話をします。



NOTE

世界中で約350億個

これは2022年に予想される世界中でネットワークにつながったデバイスの数です。総務省では2022年に世界中でネットワークにつながるデバイスの数を348.3億個と予想。これがすべてのコトがネットワークにつながるIoT時代の姿です。(総務省/令和2年版・情報通信白書より)

超ヒマ社会が来る! ～想像して、創造してほしい～

ここで素朴なギモンがあります。たとえば、これからは「自分よりスマホのエージェントのほうが賢い」つまり「スマホ同士で仕事させればすむ」。そんな時代が、もう、すぐそこまで来ているのではないかと。

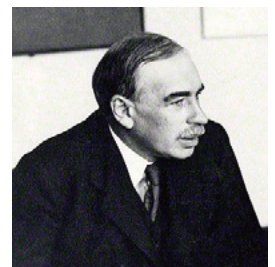
機械は人より賢くなります。人工知能とロボットが「ぼくらのかわりに働く」。

人工知能とロボットがヒトの仕事を奪います。そんな世の中を前向きに捉えたい。そして彼らに仕事を任せると、「ヒマ社会」が来る。

経済学の巨頭、ジョン・メイナード・ケインズは1930年、経済が豊かになれば余暇時間が増え、それをどう使うかが人類の課題になると指摘しています。当時の人たちにとっては「え、ウソでしょ!？」という信じられないような指摘が、まさに現実になりつつあります。



中村伊知哉 著



ジョン・メイナード・ケインズ
(1883年～1946年)
イギリスの経済学者

仕事と遊びのボーダレス化 ～「男女一生の遊び」を求めて～

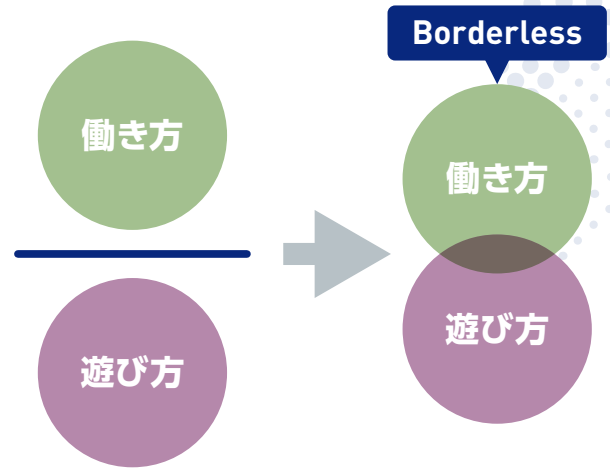
ところが、余暇は増えたが、ヒトは時間貧乏を感じている。たとえば高賃金の人ほど長く働く傾向があります。

働いて働いて冬を越すアリはAIが担います。ぼくらは遊びに打ち込むキリギリスとなり、AIアリの働かさなければなりません。

今後、もっと、もっとヒマが増える時代がきて、それをどう使うかが人類の課題になる。ひとつ言えることは、ロボットはヒマつぶしが苦手ということです。人が優位性を持つのはヒマつぶしです。

つまり、これからは本気の遊びが重みを持ちます。娯楽やスポーツ、恋愛や食事、芸術活動、創作活動。勉強や学習もそうですね。本来的には働き方革命より「遊び方革命」を起こさなければならないと思います。

どう真剣に遊ぶのか。どうクリエイティブに暇つぶしするのか。つまり一番大きな課題は「男子一生の仕事」に代わる、「男女一生の遊び」とは何か、ということです。

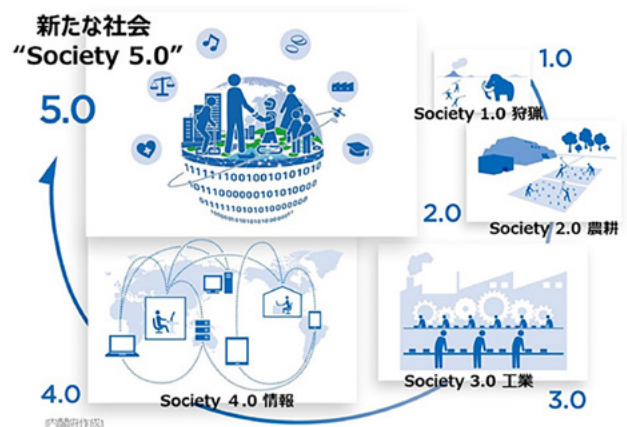


Society 5.0 ～デジタルの問題ではない。どのような社会をつくるかの問題～

ここで、近未来の社会を考えるうえで日本政府の提唱するソサエティ5.0(Society 5.0)の概念を参照します。これは狩猟・農耕・工業・情報に次ぐ第5の文明という意味です。

つまりソサエティ5.0は、デジタルの話なんかじゃない。社会と文明の話です。ぼくの「超ヒマ社会」もそのような位置づけで考えています。

ほぼ同義ですがドイツでは第4次産業革命(インダストリー4.0)と呼んでいます。ぼくは、産業の革命ではなくて、文明の革命だと思う。日本のキャッチフレーズの方が判りやすいかもしれない。はじめにお話したデジタルによるスマートな時代、これがソサエティ4.0です。



内閣府ホームページより https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/

では、「4.0」と「5.0」はどこが違うのか。ソサエティ5.0はサイバー空間とフィジカル空間の高度な融合を実現した社会です。別の角度から言えば、デジタル・テクノロジーは研究開発から産業分野に発展して、いまや社会・文明のレイヤーに及びつつあるということです。社会の中枢にどうICTを実装するのか。



NOTE

DXの誤解 ～DXレポート2より～

2020年年末に経済産業省から発表されたDXレポート2(中間とりまとめ)では、メッセージが正しく伝わっておらず「DX=レガシーシステム刷新」、あるいは、現時点で競争優位性が確保できれば、これ以上のDXは不要である、等の本質ではない解釈が是となっているとしています。企業文化、商習慣、決済プロセス等の変革に踏み込むことができるかが、勝者と敗者を分けるとしています。

コロナとデジタル敗戦 ～実はいま目の前にはチャンス!!～

さて、現実の話に戻ります。2020年、コロナ(COVID-19)が日本を襲った。ここで明らかになったのが日本のデジタル敗戦です。

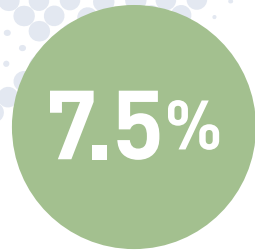
オンラインできる国の手続きは7.5%しかない。オンライン授業は5%しかできなかった。

コロナで失ったものもあれば、得たものもあります。イベントや居酒屋は行きにくくなった。これは元に戻したい。ハンコや大教室はいらないことがわかった。

コロナの“教訓”を考えてみます。ひとつはスマートな分散化ではないか。「テクノロジーで身を守れ」そんなメッセージを私たちは読み取るべきではないか。

14世紀のペスト。これで教会の権威が下がり、民衆が強くなって、生まれたのがルネサンス。再生する、という意味です。コロナによって、再生するものはなにか。

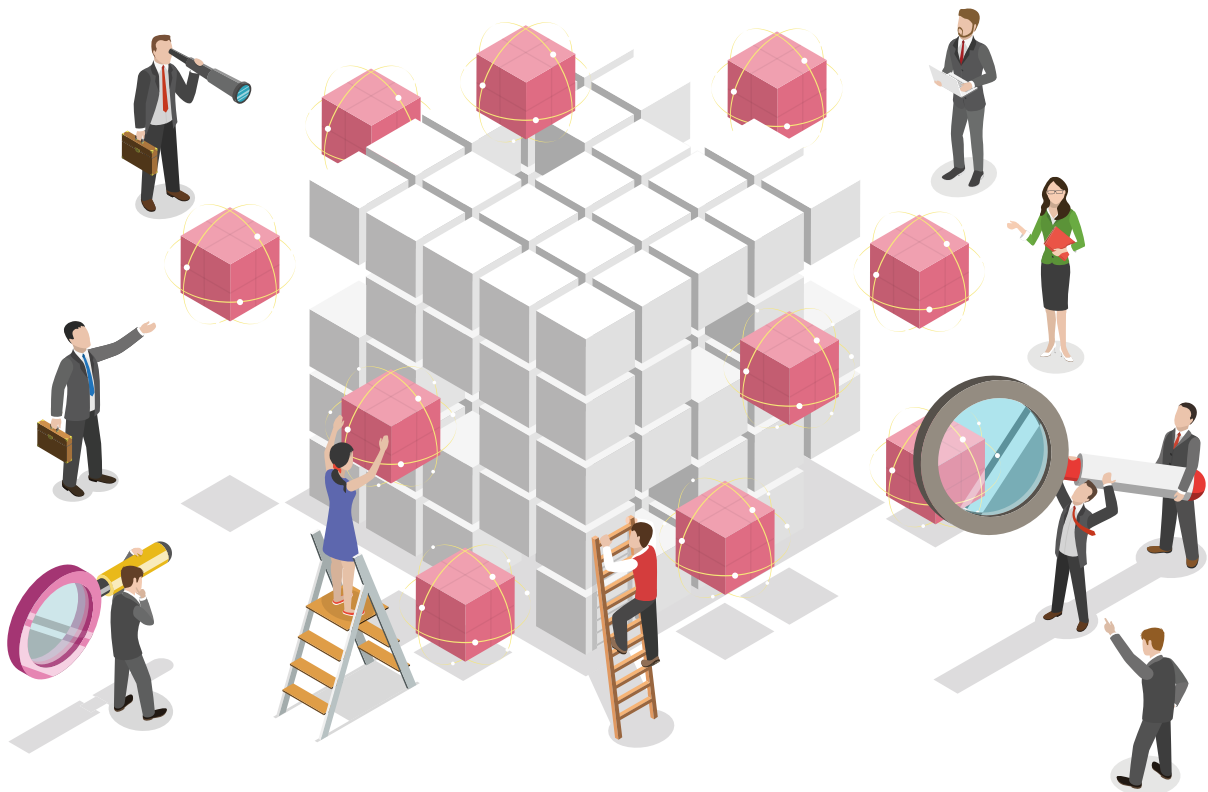
アフターコロナの新しい社会や文明をつくるための、いろんなチャレンジがDXでできればいい。「ピンチをチャンスに変える」そんなポジティブなマインドが必要だと考えています。



5万5千件以上ある国の手続きで、オンラインで完結できる割合は7.5%しかない
(2020年6月26日/日本経済新聞)



文部科学省の4月16日時点の調査によると、休校中または休校予定の1213自治体のうち、双方向型のオンライン指導をするのはわずか5%だった (2020年5月27日/朝日新聞)



Q1

ひとつの目安として2045シンギュラリティがありますが、未来はDXの先にあるのか、果たしてDXだけでいいのか他に足りないものはないのか…

ということをうかがいたいのですが。



イベントの最後におこなわれたトークセッションより抜粋・再構成しています。

現在との“手切れ感” ～DXとAIのセットで進んでいく!～



Opinion of Mr. Nakamura

そうですね。あえて言えば、DXとAIがセットで進んでいくと思います。もう、ディープラーニングに代表されるAIのすごさは自明なので、言うまでもないことですが。

ともかく、DXとAIがセットで普及して、そこにどれだけ仕事を任せられるか、ということでしょうか。

超ヒマ社会が訪れて、週休5日制になったとして、「2日働きました。5日休みました」というようにはならないと思います。もっと、仕事と休み・遊びみたいなものの境界線が曖昧になる気がしますね。まだ、みんなそこをイメージしきれていない部分があるとも思っています。

さきほど、長谷さんの講演にもあった通りで、ロボットを導入しても、ロボットをヒトが操縦し続ける…これではダメですよ。どれだけ任せられるか。その“手切れ感”ということですかね。

ただ、2045シンギュラリティと言っても、いきなりドカンとシンギュラリティが訪れるわけではない。徐々に変わっていく。

現在の働き方や
価値観と決別!



教育と自由な発想 ~シンガポールのビジネスマン達の金曜の過ごし方~



Opinion of Mr. Hase

DXの先に、超ヒマ社会もシンギュラリティもある、これは間違いないでしょう。

私がもうひとつ大事だと思うのは、教育なんですよね。これがないと、新しいテクノロジーも使いこなせないですし、新しい発想もでてきません。

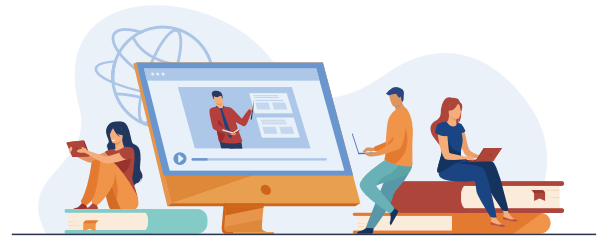
私自身、アメリカの大学に行って、ずっと外資系で働いてきて、常に欧米系の人たちと働いてきたのですが、やはり驚くのは、3カ月位のタームで、新しいテクノロジーがどんどん出てくる。特にアメリカでは、そうです。

これは、やはり、教育がシッカリとしていて、そういった新しい発

想が次々と生まれてくる。そういう意味で、中村先生が大学に携わるというのはすばらしいと思っています。

働き方でいうと、もう十年以上前の話ですが、シンガポールやドイツのビジネスマン達は金曜の午後なんて仕事していません。もっと自由な時間の過ごし方をしている。

ネットを見たり、下手したらワイン飲みながら、なにかしてる(笑)。もしかすると自由な発想は、そういうところからも生まれてくるのかもしれないね。



NOTE

リカレント教育&リスキリング

リカレント教育やリスキリングが注目を集めています。リカレント教育とは社会に出た後も、必要なタイミングで再び教育を受け、仕事と教育を繰り返すことです。リスキリングは、「新たなスキルを身につけること」とされ、DX時代の人材育成に必要な考え方として、さまざまな企業が取り組んでいます。現在は「学び続ける」ことが必要になっています。

高く心を悟りて俗に帰す ~超テクノロジー社会は、「人」に還ってくる~



Opinion of Mr. Ishiyama

自分は日々、DXに精進していますが、もう日常はタクシーのなかでテレビ会議をしながら、チャットを返し、プレゼン資料やプログラム開発も同時に走らせて…
もう、超ヒマ社会とは真逆です(笑)。

ただ、その先に、超ヒマ社会が来るのだと思っています。

私が最近、思うのは、奥の細道で有名な松尾芭蕉ですが、彼の有名な言葉に「高く心を悟りて俗に帰す」というのがあります。これは、芭蕉は俳句の超絶技法的な境地に達するわけですが、それを棄てるんですね。そして“かるみ(軽み)”に到達する。

つまり、どこかで「人」に還ってくるのではないかと。これがいまの自分のテーマなんです。そして、DXに足りないものがあるとす

れば、その部分かと思っています。

テクノロジーが超絶技巧的な域に達したときに、ヒューマンなものに還ってくる。

そういった意味で、最近では文化レイヤーにあるようなデータの可視化や、エビデンスの取得などの活動もおこなっています。

AIの活用は「文明レベル」から「文化レベル」へ

今のAI産業の戦いは第3ラウンドに入っています。過去でいうと、第1ラウンドはサイエンスの世界、AIの論文数の競い合い。第2ラウンドはビジネスの規模。GAFAのように、AIを活用したビッグビジネス化。ここまでが文明のAIです。第3ラウンドは社会的な価値、ソーシャル。「人を大切にする」という視点がとても重要で、文化的なAIに変化すると思います。

※イベント内の石山氏の講演より



Q2

DXを通して、人々がICTでつながる未来。どうすれば、そのような流れを加速できるのか、そしてDXのスピードアップに必要なこと…

をうかがいたいのですが。



イベントの最後におこなわれたトークセッションより抜粋・再構成しています。

“いいなあ”をシェアする ～マーケティング&ESG経営の視点から～



Opinion of Mr. Ishiyama

たとえば、長谷さんのBlue Prismを例にすれば、「RPAを導入して、こんなにヒマになった」というような話を、どんどんひろめて、発信していく。

「え、ホントにそんなヒマになったの?!」 「いいなあ、ソレ」みたいな話を多くの人とシェアしていくわけです。

もちろん、テクノロジーとしての優位性みたいな話もありますが、そういう攻め口ではなくて「家族と過ごす時間がこんなに増えた!!」といったアプローチです。さきほど少しお話した、「人」に還っていくという意味もこめて。

これはひとつのマーケティング戦略とも言えるし、もっと言えば

ESG経営やダイバーシティといった領域とも連携してくるのではと思っています。

テクノロジーが、ただ進化していくのではなく、そこで得られたメリットを分かりやすく社会のなかでシェアしていく。これがDXを加速させるキモになる気もしますね。



実は“いい話”は一杯ある ～人はなんのために働くか。定型業務からの脱出～



Opinion of Mr. Hase

いまの石山さんのお話は、ものすごく示唆に富んでいて…
大変ありがとうございます(笑)。

実は、そのようないい話は一杯あるんですね。一例をあげれば、ある大手の総合商社さんの事例ですが、そのお客さまでは従来のRPAに加えて弊社のサービスも導入いただきました。

現場の社員の方は、やはり日々、いわゆる定型的な業務に追われている。それで、弊社のサービス導入をキッカケに定型業務からかなり解放された。ある社員の方が、それを涙を流して“嬉しい”と仰っていただいた。これは弊社担当から聞いた話ですが。

ここからは私の想像ですが、やはり、そのような大手商社に入社する優秀な方はどこかで、「世の中を変えたい」というような“志”が原点にあるのではないかと。結局、人はなんのために働く

のか。そういう根源的なニーズに応えうるサービスでもあると思っています。

さきほどの「家族と過ごす時間が増えた!!」もそうですが、“いい話”は一杯あります。パートナーのNTTコミュニケーションズさんとも協働して、どんどん発信していきたいと思います。



ひとつハッキリしたこと ～コロナ禍が教えてくれた、私たちのスタート地点～



Opinion of Mr. Nakamura

いまの石山さん、長谷さんのお話は、まさにその通りだと思います。より人に近いレイヤーで「こんなにヒマになった」「こんなに儲かった」「こんなにハッピーになった」という情報がどんどん発信されればよい。

これは、「政策」というレイヤーで考えれば“太陽政策”ということですね。実は、ぼくはこの何十年、デジタル化が全然進まない日本をみていて、もう太陽政策ではムリで“北風政策”しかないかな、とも思っていました。

北風政策というのは、日本が経済的に全然ダメになってしまうこと。つまり“IT化が遅れたから”などの手痛い失敗の教訓をベースにゼロから立て直すスキームです。

ただ、太陽政策でいけるかもと思いだしたのは、今回のコロナ禍なんですね。ひとつハッキリしたことがある。それは日本のデ

ジタル化が決定的に遅れていることが自明になった。日本人全員がこれを共有化した。

これはとてつもなく大きいと思っています。遅れているのだから、デジタルもAIもDXも、ガッツと推進すればよい。それだけです。コロナ禍のおかげで5年、10年、先に進んだ気もちよっとします。



Q3

もし「超ヒマ社会」が実現したら なにをしたいですか？

ゲスト回答を読む前に、
是非、アナタも考えてみてください。



イベントの最後におこなわれたトークセッションより抜粋・再構成しています。

社会貢献をしたい ~ヒマになって、フォーカスされるものとは~



Opinion of Mr. Hase

自分を“いい人間”に見せたいわけではないのですが(笑)…社会貢献をしたいというのはあります。これは近年の企業の在り方として「社会課題を解決する」というカタチが主流になりつつあることもあって。

最近、若い人と面接などで話しても、給与よりも、むしろ「自分の存在意義」みないなことに、こだわりが強いという印象があります。あとは働き方ですかね。

本日の「超ヒマ社会」でいえば、それは選択肢のひろがる社会だと思います。さらに、人口減少社会ということもあって、企業が「オフィス出社が必須」「週5日出社以外はNG」なんて言っても、もうダメですよ。 「選ばれない会社」になってしまう。

さらに、日本全体がそんな硬直した国になってしまえば、優秀な若い人は、海外に行ってしまうよ。ね。

そんなことを考えながら、社会貢献といいますが、社会にコミットしたい。結局、ヒマになっても、いきがいや、やりがいが大事かと。むしろ、ヒマになるほど、そちらにフォーカスがあたっていく気がします。



NOTE

CSV経営とは

CSVとは米ハーバード大学マイケル・ポーター教授が提唱したもので「Creating Shared Value (共通価値の創造)」の略語。社会的価値を戦略的に追求すれば、経済的価値も自然に生まれるという考え方を指します。 社会の利益と一企業の利益を同時に追求できることから、持続可能な経営に必要な考え方として注目されています。

考えたい ふたつのこと ～多様なヒマのカタチはどのように生まれるのか～



Opinion of Mr. Ishiyama

ヒマになったら、ふたつの考えたいことがあります。ひとつは、“ヒマのパターン”が多様になっていくのか、一様になっていくのか。

シンギュラリティの“シンギュ”は、“シングル/ひとつ”という意味ですが、世界がヒマになって、みんなが同じことをしていたら、やはりキモチ悪いですね。

だとすると、多様なカタチのヒマというものが、どのように生まれていくのか、ということにもものすごく興味があります。本当は、ヒマになる前に考えるべき問題の気もしますけど(笑)。

もうひとつは、ヒマになると「戦争はなくなるのか/争いはなくな

るのか」少し青臭いですが、そんなテーマも考えてみたいと思っています。

ヒマと多様性、ヒマと衝突/紛争みたいなことを、ヒマになったら考えてみたいと思います。



勉強をしたい ～不確実な時代を生き抜くための基盤とは～



Opinion of Mr. Nakamura

ヒマ社会になったら…これももう、シンプルに勉強がしたい!!。それも“勉強をしなきゃ”という義務感ではなくて、勉強をしたいという欲求というか、それが強いですね。

これは、ひとつには、ぼくは全く勉強してこなかった(笑)。ふと気がつ

けば、プロデュースとか、そんなことばかりしてきたんで。

いま還暦をむかえて、今年からネットで中国語の勉強をはじめたら、ムチクチャおもしろい。知らないことにチャレンジする、これはともかく、楽しい。

いままでのデジタルの世界は「ムーアの法則」があって、ひとつの目安になったけど、これからは、どうなるか全くわかりません。

いま人類が共有しているのは、「これからは何が起きるか全くわからない」ということ。これがただひとつ、人類が共有していることです。

もう、「変化を楽しむ」しかない。そして、そんな時代を生き抜く基盤があるとしたら「学び続ける覚悟」だと思っています。それで、なにを勉強すればよいのか、それはまだ、あまり見えてないのですが(笑)。



VUCAの時代

「VUCA(ブーカ)」とは、Volatility(変動性)・Uncertainty(不確実性)・Complexity(複雑性)・Ambiguity(曖昧性)の頭文字をつなぎ合わせた言葉。2016年のダボス会議で使われたことで、有名になりました。



NOTE

Message

トークセッションの最後に3名のゲストから贈られたメッセージを紹介します。

ピンチは チャンス



iU学長
中村 伊知哉 氏

若い起業家と話すと、みんな「今の状況はある意味チャンスでもある」と言います。現在の状況を前向きに捉えるマインドセットこそが最も重要だと思います。

Blue Prism社長
長谷 太志 氏

いままでのRPAのイメージを覆したい、これに尽きます。これが日本への最大の貢献になると考えています。

インテリジェントな デジタルワーカー (≠今までのRPA)



非相対的主義的 非全体主義的 超ヒマ社会



エクサウィザーズ代表取締役社長
石山 洸 氏

ポール・ファイヤーイベントが指摘するように過度な相対主義に陥らず、多様性と民主的な構造をもった超ヒマ社会を実現したいと考えています。